

令和5年度 第1回
薩摩川内市総合教育会議
会 議 録

開催日時：令和5年9月19日（金） 開会：14時00分
閉会：15時27分

開催場所：薩摩川内市役所 5階 教育委員会室

出席者：

田中市長、藤田教育長、軍神教育長職務代理者、枇杷教育委員、土器手教育委員、
常盤教育委員

事務局：

（市長部局）

鬼塚総務部長、黒木総務課長

（教育委員会）

上大迫教育部長、坂上教育総務課長、中津学校教育課長、坂下社会教育課長

傍聴者：なし

資料：別紙による

議 事 録

令和5年9月19日（火）

【開会時刻 14:00】

(1 会次第1：開会のことば)

総務課長 ただいまから、令和5年度第1回薩摩川内市総合教育会議を開会いたします。それでは、田中市長にご挨拶をお願いいたします。

(2 会次第2：市長挨拶)

田中市長 教育委員の皆様方には、常日頃から市政運営にご協力いただいております。ご案内のとおり総合教育会議は、年1回程度の開催になっておりますが、市長と委員の皆様との意見交換をさせていただくことで、教育行政の方向性の共有、連携、それから本市の教育行政に取り組む方針の確認ということで開催しております。今日は2項目、「教育分野における子育て支援のあり方」、それから「キャリア教育の現状と今後の展望」について、非常に大きい喫緊の課題ということで、2つテーマを出させていただきました。

先ず、広範な分野である教育分野における子育て支援について、学校あるいは保護者が考える支援内容と、現実と方向性にどんな違いがあるのかをお聞きしたいということがあります。

それから、キャリア教育も非常に重要なことで、産業人材の人手不足という現実の中で、どうやって学校でキャリア教育を進めていくかということも考えていかなければならないと思います。

この会議は、何かを決める会議ではなく、自由な意見交換の中で方向性の共有と、教育分野における政策方針の大きな参考にする会議でございますので、忌憚のないご意見をよろしくをお願いいたします。

(「出席者紹介」について)

総務課長 ※ 出席者を紹介

それでは、これより議事に入ります。市長に議長をお願いいたします。進行をよろしくをお願いいたします。

(3 会次第3 「(1)教育分野における子育て支援のあり方」について)

田中議長 それでは、会次第の「3協議」の「(1)教育分野における子育て支援のあり方について」、説明をお願いします。

※ 会議資料に基づき、(1)教育分野における子育て支援のあり方について
上大迫教育部長が説明

田中議長 　ただ今、説明をいただきましたが、これから自由な発言になります。私も市長3年目になりまして、この会議のターゲットとなる、幼稚園から小中学校の薩摩川内市の子ども・子育てという長いスパンで考えますと、子供が生まれる前の出会いから結婚、妊娠、出産、産後ケア、保育、幼稚園、小学校、中学校、高校から就職支援、さらにまたその子の出会いということで、大体30年間ぐらいのスパンで、令和5年度の当初予算で86億円を子ども・子育てに予算計上しております。これは、当初予算の16パーセント相当ということで、当然義務的というか政策的にも多額の予算を議会の承認をもらい、資料にもありますように、就学支援で1億5千万、スクールバスで1億7千万と重視したところなんです。この教育分野における、子供たちの環境整備をしていこうということと、後から出てくる少子化対策、人口減少対策までとなると幅が広がり、産み育てやすい環境から定住人口の増、その次のキャリア教育までなると考えております。本日は、一連の子ども・子育ての30年間スパンの86億円の中の義務教育、幼稚園、保育もありましたけれど、その範囲での子育て支援の議論かなと思うところです。各委員の方で、薩摩川内市の課題もですが、優れている点とか不足の点や、保護者から聞いていらっしゃる意見、また、ご自分がPTAで活動をされている等で、教育分野における子育て支援の意見がありましたら出していただきたいのですが、まずは、枇杷委員からご意見をお願いします。

枇杷委員 　教育分野における視点ということで、このテーマをいただいた時にいろいろ考えたのですが、昔に比べて家庭環境が多様化していること、その変化がすごく大きいと感じます。学校の先生方がいくら頑張っても、やはり家庭が思いを受け止めてくださらないと、子育て支援も上手くいきません。現状から見ても、塾に行っている子供と行っていない子供がいるように、児童クラブも行っている子と行っていない子がいますが、児童クラブは学習面に関して言うと、すごくチャンスであると思います。子供が児童クラブである程度の学習ができれば、その子の学習面のサポートになります。また、とても思うことなのですが、今核家族化が進んで、親だけで子供を育てる家庭が多いのですが、昔は周りのおじちゃん、おばちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんたちが「これしちゃダメよ。」とか、いろいろな声かけをしながら、みんなで子育てをしていたような気がします。今はそういうことがなかなかできなくなっていますが、薩摩川内市では、コミュニティスクールを導入して、地域の方を巻き込んで子育てをしていく方向性は整っていると思いますので、地域の方の力を、もっと活用できたらと思います。さらに、いろいろな面で困り事を抱えている子供たちが、何でも相談できる体制や仕組みができたらと思います。

市でヤングケアラーのアンケートを取っていただきましたが、実態を把握するという点ではすごく良かったと思っています。ただ、兄弟や親の面

倒を見るのが、その子にとって苦痛であるかどうかというのは、その本人の思いがあり、「僕はこんなに頑張っているんだよ。」という意見発表をしてくれる子供もいるので、それ自体が良いとか悪いとかと言えないのですが、支援が必要な家庭に対して、早く周囲が気付くことが大切かなと思います。虐待に関しても同じです。

話があちこち飛んでしまいますが、姪が川内で子育てをしていますけれど、今、小学校2年生と幼稚園児ですが、とても子育てしやすい環境であると言っていました。子供が生まれると、保育園で新米ママさん達を集めてのサポートがあり、また、姪の子供が通う小学校は25人ぐらいクラスで、子供たちものびのびとしており、先生たちも目が行き届いて、とても良い環境で学習できていると聞いています。

田中市長 ありがとうございます。非常に、私では気付かない良い意見で、地域で育てる考え方、それから気付くと相談体制ですね。

また、珍しく褒められまして「本市は子育てしやすい」と、そういう意見も、ある部分では、自信を持って言わないといけないなと今思いました。常盤委員、いかがでしょうか。

常盤委員 行政の退職前に、子育て支援の担当をしておりました。丁度、子育て世代包括支援センターの立ち上げの時期で、子育てサポートネットというポータルサイトやアプリについて、今の子育てに合わせた支援をしていこうという方針が国から出されて、その体制を整えました。今、市長が言われた妊娠、出産、産後ケアから育児不安への対応など、重点的にやっていこうということを進めていて、親の育児不安が、子供の育ちや教育に大きな影響を与えるので、やはり、育児不安に対応する母子保健行政は、とても重要だなと思います。枇杷委員も言われましたけれど、薩摩川内市の母子保健の相談体制、保健部門、福祉、学校、要保護児童対策委員会などの体制は、私より前の川内の保健師たちが、頑張って取り組んできたので、県下でもとても整っていると言われていました。

この「教育分野における子育て支援」というテーマをいただきましたが、教育委員会における奨学育英事業の対象者選考でも、実際はもっと困っていて申請していない人がいるのではないかと、また、給食費の未払いにしても、本当に困っていて払えない人と、道徳的に問題があって払わない人がいるということも聞きますので、公的な支援制度が、本当に必要な人に支援が届くというのはなかなか難しいのではと感じます。私も、母子や高齢者の事業をしていて、いつもそこは課題になるところだと思っています。そういう意味では、枇杷委員が言われたように、相談体制が整って、学校側から相談ができるというメッセージが、子供に届いていることが大事だと思います。担任の先生も大変な業務がある中で、児童生徒の家庭のことなど、全てに対応することは限界があると思うので、早期に気付いた時にいろんなところに繋がられる、そういう相談体制がやはり重要だなと思います。

また、この後のキャリア教育にも繋がるとも思いますけれど、その子供たちの生きる力、自立する心、コミュニケーション力などが育っていけば、

困難に直面した時に助けを求め、助けを求めながらも、自立の方向を探していくということができるのではと思ひまして、そういう意味でも、教育の果たす役割は大きいと思ひています。

あと一つ、給食費のことですが、未払いなどいろいろな問題があると思ひますが、あまねく支援をするということであると、対象者がどんな状況にあるかに関わらず、例えば小学生を対象とするなどの、ある程度の基準を決めて助成を行うなどの手法があると思ひます。この全体の支援ということでは、給食費の助成は、望ましい食習慣がこの時期に身につけて健康な生涯を送るとか、給食の果たす役割というのは、非常に大きいと思ひられます。保護者や先生達と話した際に、「やはり地元の食材を使った給食を食べることで、薩摩川内市に育ててもらったという感覚も生まれるのではないか。」という意見がありました。その時に思ひたことが、給食費の助成を行うとした時に、感謝の気持ちですね、これが当たり前ではないということを理解することが大事で、給食が自分のところに届くまで、農家の方とか給食を作る人、いろいろな生産者がいて、その命をいただくことに感謝することが大切だということです。あと、税金を使ってそういうことがなされているということについて、鹿児島市の小学校が税の勉強をしたという記事が、今日の新聞に掲載されていて、小学生ながら、どの産業に税を使うとか、どの保健事業に使うというのを考えてみるという内容だったのですけれど、保護者も含めて公的な支援を市から受けることで成り立っているという感謝の気持ちを、きちんと学校教育の中で伝えながら、こういう制度が進められたらと思ひます。

田中市長 ありがとうございます。2回目のお褒めをいただきました。母子保健体制が良いということですが、やはり相談体制ですね。この給食費を払わないのか、払えないのか、払えないのに気付くということや、子供たち自身がアラームというか、SOSを出すコミュニケーション能力を持たないといけないということですね。

それから給食費の件を今日言おうと思ひてメモしてきたのですが、この議論は、特にコロナ禍における、いわゆる生活困窮ということで、経済的困窮世帯が給食費を払えないということで、薩摩川内市では値上げ分を補助しているということがあります。あと、日本人の価値観を変化させたのはいわゆる無償化の時代、1人10万円給付、全世帯5千円、国民、県民の平等性という意味からは政策として正しいのですが、これがアフターコロナになっても、全て無償だという部分が強くなってきているような気がします。私の考えとしては、義務教育であれば国策でおしなべて給食費から全部無償にするというのもありと思ひます。ただ、負担があつて給付があるということも、子供たちも親も改めて分からないといけないのではないかなと思ひます。ちなみに、議会でも給食費の無償化の要望は出ていますけれど、一般財源で約4億円、これは非常に多額です。それだけ人口のキャパが大きいものですから、現時点は、一般財源で給食の無償化というのは、極めて難しいという段階です。それでは、軍神委員、教育分野の子育ての支援について、ご意見をお願いします。

軍神委員

こども家庭庁ができたので、国から県、本市までどのように変わるのか期待をしていますが、まだ実感としてない。この、こども家庭庁が描いている部分というのが末端まで届いて、子供たち自身が大きく変わる、学校あるいはいろいろなところが変わるというのが、一つ私の願いです。資料の中にある、とても意義ある授業なのですが、甕アイランドウォッチングは4年生が行くのですけれど、もしこれがなければ、小学校6年間で1回も甕島に行かない子供もいるのではないかと思います。甕大橋が開通して、甕島全体のいろんなものが大きく変わってきていると思いますし、そういう意味では、本土の子供たちも甕島に行って理解し、甕島で学んでくるというのは非常に大切なことで、これは本当に良い授業だなと思っています。

それから、資料の6番と7番に、6番は高校生の奨学金ですが、1億6千万ですかね、心苦しいですが選ぶ時に、非常に迷うようなケースもありまして、家庭の状況とか成績とか考えた時に、もう少し人数を増やしていただけないかな、というのは感じました。それから、就学援助費については、要保護者がもらっているというのを今日初めて知って、要保護というのは、教育委員会の所管なのかなと思いましたが、もらっている要保護の部分というのは、修学旅行とかそういう一部のものらしいのですけれど、これも非常にありがたくて、要保護者、準保護者、特別支援者というところで、就学支援に係るものを援助していただいているというのは、本当にこれはありがたいと思います。先ほど市長も言われましたが、給付を受けているという、親自身の自覚も必要だと思います。これは給食費にも繋がる考え方だと思いますが、公的なお金であって、これはどう使わなければいけないのかと、自覚する必要があります。当然子供の教育のために使うものなのですけれど、やはり大人の人たちの自覚、あるいは大人の考えというのは、きちんと持たなければいけないかなと思います。いくら支援をしても、教育のために使われなくて、他のところに出ていくのではないかと、この心配もありまして、その辺の意識改革ができれば良いかなと思っています。

田中市長

こども家庭庁は、今年組織が発足して、まだ政策が後追いで予算も防衛予算先行で、軍神委員が言われたように、例えば、給食費を言いましたけれど、義務教育はやはり国策で、市町村の財力によってこう差があればいけないと思います。だから、こう義務的なベーシックというのは、国の責任において統一的な財政担保をすべきと、私は思っています。

今年から2年間、30代の職員をこども家庭庁に派遣しておりまして、情報を仕入れて政策に活かしたいと思って、今頑張っております。

それから、甕アイランドのことがありまして、本土の子供たちが甕島を知るということは、貴重な薩摩川内市の一体化に資する素晴らしい事業だと思います。

あと、甕大橋が開通して甕島4町内の交流もやっと始まったというのがありまして、甕島4町9つのコミュニティがありますが、ご存じのとおり、上甕島の方は下甕島に行くことは何十年となかったと、そのような人も相当いらっしゃいます。まだ3年目ですけれども、甕大橋効果で甕4町内の子供も大人も交流が始まったこと、それから本土の子供たちが行っても、

1 日圏内で甌4町を回れるということは、非常に良いことだなと思います。それから、軍神委員の方から高校生の特別奨学金の話が出ましたが、私もいろいろ話をして、産業人材確保と移住定住の戦略協議会の検討テーマで出していますが、是非、教育委員の皆様方にもご理解いただきたいのは、給付型で、特に貧困というか、経済的にハングリーな人に、月1万5千円の給付で、今、40人の年間予算720万円を予算措置しています。基金が1億6千万と20年分ありますので、この11年目から20年分は、来年度からの人数拡大に、ぜひ振り分けていただければと思います。全体的な議論の中ですけれど、教育に要する貧困家庭の経済負担の軽減というのはあるべきことだなと思います。土器手委員は、いまPTAでしょうか。子育て支援についてのご意見をお願いします。

土器手委員 市長が言われたとおり義務教育は、国が見てくれたら良いのにと思っているのですが、どうして国は最初からそういうことをしないのかなと不思議に思うのですが、この子育て支援にもいろいろな事業がありますが、市民の声とか、お父さん、お母さんたちの声として、実際どういう意見があるのか。行政も、求める声があったから事業を実施しているのですが、実際、家庭や各現場の声をどこまで拾っているか、どういう意見が多いのか、気になります。先ほど「薩摩川内は子育てしやすい」という意見があると話がありましたが、以前、従業員が子供が生まれた際に、子育てをするためにいちき串木野市から薩摩川内市に引っ越そうかとなりまして、上の子どもたちの環境もあるので、すぐには動けなかったのですが、薩摩川内市は幼稚園が無償であることに惹かれていたようで、その話をして引っ越しを勧めていました。結局、いちき串木野市も4月から無償になりましたが。

また、子育て支援事業については、86億円もの予算を30年間の若い世代を見てもらえているということが、ありがたいと感じました。今、薩摩川内市に住んでいる子供たちは、生まれ育ち、また結婚をする中で、たくさんのお恩恵を受けてきたこと気付かずに成長して生きていくと思うんですよ。その子供たちが、物心ついて、将来子育てをした時に、自分が受けてきた支援制度が分かって「こういう制度があって、この制度もあったな」と。自分の子供を育てる時、またその制度を活用して、その恩恵を受けた子供たちが大人になっていけば、市への感謝の気持ちが芽生えたり、気付いてもらえればなと思います。あと、86億円の予算はすごいなと、財政は大丈夫かなと心配したところでした。

最後に、子育て支援のあり方は、お金で解決することもあるかもしれませんが、本当に大変だと思います。僕も今更ながら、奥さんにたくさん負担をかけてきたのだらうと思います。考えただけでも夫婦協力、お父さんお母さんの協力、昔からの周りの人、近所の方の協力と、本当にそれがあれば子育てはだいぶ楽だなと思います。いろいろな支援も大事だけれど、やはり、人間同士がお互いに協力し合って、お互い優しく大きな心で、みんなで子供を育てて守っていきましょう、というのが1番の支援かなと思います。

田中市長 ありがとうございます。非常に私も身につまされる大きな良い意見で、

後でも出てきますが、人材確保とか移住、定住の動機が、こういう教育とか福祉を含む住みやすさということですね。給料うんぬんもあるんですけど、やはり、町全体の住みやすさということは、非常に大事なことです。

ライフステージの30年間で、単年度86億と説明をしましたが、特色あるこの子育て、教育への予算の使い方がシティセールスになりますし、土器手委員も言われたように、親御さんたち、保護者の方も、何千万、何億ではなかったとしても、こういう配慮というか、寄り添った予算があったなとなるように令和6年度はしています。それから、枇杷委員からありましたように、子育て、教育というのは、家族や地域が一体となって取り組むというのが大事だと思います。私も子育ては、ほとんど妻に任せっきりで、前もちょっと反省したんですが、今、少しずつできることはやるようにしていますが、これは非常にベーシックですけれども大事なことだと思います。

土器手委員 今、18、16、13歳の3人の子供を育てています。私の会社はうちの母親が会社の経理をしてくれているのですが、「一人も一人もお金がかかる。稼いでも稼いでも足りない。子供たちに全部吸い取られる。」と話すので、「でも今はいい。もうお母さんたちのころは全部自分たちで、あなた達を育てる時は、自腹、自腹だった。」と母親に言われます。今思えば、私の姉も大学に行き、私もお金を使ったので、私が結婚した後27、28歳ぐらいまで、うちの親は借りの学資ローンを返していました。多分、奨学金を子供が社会に出た時から背負わせたくないというのがあったのかなと思います。

市のLINEのお知らせで今日届きましたが、奨学金返還補助というのを見まして、少しは育てやすい世の中になっているんだろうなと感じました。母親には頻繁に「あなた達の頃はいいよ」と言われますので、実際どうなのかかわからないですけど、何かふと気になり、良い時代になってきているんだなと思ったところです。

田中市長 今、土器手委員から奨学金返還支援の件で、我が意を得たりではないですけど、これは喫緊の課題で、ご家庭と学生本人の負担軽減で一般論的に言うと、22歳で卒業すると大卒の人は300万から400万の奨学金という非常に重たい借金を背負います。今の市役所の制度は、2分の1補助で年間20万、トータルで200万は補助しますという制度で、今3、4年、始まっているんですけど、今プロジェクトの方で、ここを基準緩和して補助率のアップとトータルの奨学金返済の市の補助金を増やそう、というような議論を議会にも相談し始めて、まともれば来年4月からでもしていこうということで、今準備中でございます。では、教育長からのご意見をお願いします。

藤田教育長 かねてから、教育委員には今年から教育委員会の進め方も少し変更させてもらいまして、いろいろ協議題を設けてご意見をいただいているところです。

今年度、今日のこの会議が大きなターニングポイントになるのではと思

いまして、大変ありがたく思います。教育は、2つの面から話をさせてもらおうと、1つは、昨日の新聞にも載っておりました、川内北中学校のバレーボール部が全国大会に行った時のその部員の感動ですね、頑張った甲斐があったという、子供の成長を自ら感じたということと、それから日曜日は、市長をはじめ中学校の体育大会に行っていたいで、それぞれ感動を覚えられたのではなかろうかと思います。これも川内北中ですが、北中はんやを踊ったあと、指導してきた女性の体育教師が涙を流していました。それはまさに感動だと思うんですね。それから、先ほど委員の方々から、子供の成長を喜び合う地域の方々の姿があるということ、これはまさに、子育ての喜び、現場の声です。それから、9月に入りまして、市内の教頭が「教職は良い仕事だ」ということを新聞に投稿し、校長も「30年前担任した子供と10年おきに再会する、これこそ教職に就いた喜びだ」という情報発信をしてくれました。これは学校現場の子供の成長、そして地域が見守ってくださる良さだと思います。そういう意味では、学校現場と合わせて、一生懸命、今後も子供の成長を促していきたいと思います。

もう1つは、いろいろと支援策が出ておりますが、最近テレビニュースでも、特集を組まれた兵庫県明石市の子育て支援について、先ほど市民ニーズがどれだけ、というような話がありましたけれど、市民のインタビューにより構成された紹介がありました。その中で、「やはり子育て施策は未来政策だ」というキャッチフレーズのもとで「子育てするなら明石」というのが、ものすごく広く市民に、あるいは市外の子育て中の方にも浸透しているという内容でした。先ほどから、子育てはしやすいよという、薩摩川内市のいくつかの声を皆さんに届けていただきましたけれど、もっと広報をいろいろ工夫していくことも大事であり、また、予算を組んでの支援策というのは、貧困に対する支援も必要ですし、あるいは学びたいという子供たちへの精神的支援と金銭的な支援、これに尽きるかなと思います。

今、学校では、子供が学ぶということの子供自ら学ぶという、これに重きを受けて毎時間の授業づくりに取り組んでおりますので、「先生、お母さん、お父さん、私ね、どこ高校に行きたいの、どこ大学に行きたいの」、あるいは「海外に行って勉強したいの」という子供の声が届いた時に、「市のこういう制度を活用できるかもよ」というようなことを、市民の方や親が、学校だと校長、教頭が知っていれば、SOSを出せるのかなというのを思いました。それはなぜかと言いますと、先ほどありましたように、家庭に起因する諸問題行動を子供が起こした時に、ヤングケアラーの課題もそうですが、相談をする場所を知らない、中学生、高校生が「市役所の2階に行くと何か教えてくれるよ」というようなことを、もし知っていたら、その子は救われるんじゃないだろうかという、そういうような施策と併せての広報というものを今後、充実していければと思います。それは、学校現場から各家庭に行き渡るというラインはできていますので、そのようなことも今後、教育委員会も含めて取り組んでいくべきと思いました。

田中市長 ありがとうございます。最後の方で、子供たちが相談する場所を知らないという言葉がありましたが、今日、市役所の若手チャレンジプロジェクトで4チームが意見発表した際、その中の2番目のチームが「街の保健室」

という切り口で、病院に行くまでではないけれど、ちょっと困り事というか、全てのことを、街中にあるコーナーを作ってそこに相談するという、採用3年以内の若い職員の意見でしたが、先ほど教育長が言われたような気付かせるというか、相談窓口を作るという発想はこれからも必要なことかなと思いました。

もう1項目ありまして、私が子育て支援で気になっているのは、トイレの洋式化がございまして、昨日、東郷学園義務教育学校の運動会を視察に行きました。鹿児島県、九州に誇る素晴らしい施設でシステムも施設も素晴らしい。このトイレの洋式化になりますと、数字的に薩摩川内市は、県平均、国平均より低いことから、子供たちの快適環境と言いますか、今ある現状から改善していくような取組みを、具体的にしていかなければならないと思っています。なかなか整備する仕組みが、教育委員会のちょっと細かい話ですが、技術職員が足りないのか、そういう作る設計、工事は民間に委託するとか、やり方的には難しい話ではないし、いつも職員に言いますが、その一基自体で、何千万、何億という話ではないので。私のイメージから言うと、ほとんど今の子供たちは、生まれた時から水洗の洋式だと思うんですね。私たちが子供の頃と全然違って。そこは当たり前のアベレージに近づくように、我々大人が意識しないといけないと思いました。

今日は、2項目ありまして、キャリア教育を説明していただいて、後でまた総括で皆さんのご意見をいただきたいと思えます。

※ 会議資料に基づき、(2)キャリア教育の現状と今後の展望について
中津学校教育課長が説明

田中市長 ありがとうございます。予習をして思いましたが、社会科見学の中で、いわゆる民間企業というか、いわゆるキャリアと言った時に農作業体験とか、海星中で、酒造、スーパー、宿泊施設などを体験していますが、全市的に各学校の判断で行っているんですか。

藤田教育長 本市には、企業連携協議会という素晴らしい組織があります。毎年、この協議会から全学校への出前授業を、かなりの数の社長さんに行っていると思っています。それと併せて、今度は、現場を見させてくださいという、その継続的な社会科見学の中でやっております。単なる遠足だけではなくて社会科見学を兼ね合わせた行事も計画しておりますので、当然、教育課程の編成そのものは、学校長の判断ですが、ほとんどの学校がそれを取り入れております。ますます、企業連携協議会の方からのラブコールも多くなって、非常にありがたいと思っています。この度設置された人材確保・移住定住の協議会にもメンバーがいらっしゃいましたが、この子供たちのキャリア教育については、本市にあっては、より土台がしっかりとしてくるのではないかなと期待しているところです。また、私たちも推進していきたいと思っています。

田中市長 ありがとうございます。私が、このテーマを選んで、またこの資料を見て、キャリア教育というのは、国の法律に則って進むという一般論で、こ自己決定、基盤となる能力や態度を育てる、分かりやすい言い方で、どこに住んでも良い、どこに就職しても良いという、この部分だけの理念論であれば、我々大人は、喫緊の人手不足があることから、いわゆる囲い込み論ではないですが、小さいうちからふるさとの自然、文化と合わせて企業という、「ふるさとに就職してほしい、ふるさとに住んでほしい」というのが、特に今年は出てきているというのがあって、あまり性急過ぎてもいけないですが、居住地と職業は自由ですよ、だからといって、この人口減少の中で、我がふるさと薩摩川内の全産業を知ってもらって、子供たちの選択肢の中にあるような、すり込みではないですけど、先程、教育長がその企業連携のことを言われましたが、そのようなことをすべきではないかという、乖離を私自身が感じています。理由を言いますと、今、企業連携協議会の話で出ましたけれど、どこまで地元就職、地元定住を目的とするかということで、あまりしつこすぎても、それが教育かと選択の自由を奪うということですので、淡々とした中にさらに薩摩川内市の様々な社会科見学とか、元気塾、企業連携との交流の中で、薩摩川内の1次産業、2次産業、3次産業をタイムリーに、全学校どこかに入れるような仕組みが、現実的に必要ではないかと思えます。理由は、薩摩川内市の高卒者の話ですが、地元就職率が去年の3月で19パーセントでした。今年の3月、プラス11パーセントで30パーセントになりました。非常に劇的な増加で、半導体企業の募集があって、今、人が非常に足りません。そのため、鹿児島県全体の高校生の県内就職率が60パーセントまで来ています。薩摩川内市が劇的に伸びているということは、非常に良いことで、鹿児島県全体はやっと50パーセントを突破して、低いと言われながらも60パーセントあります。また、進学もありますけれど、市外の高校に行っても、薩摩川内市の企業に就職する、市外県外の大学に行っても、薩摩川内市に就職するというような呼び込みというか、こういったことが大事じゃないかなと、強く思っているところです。私の性急過ぎるような持論なのですけど、枇杷委員の方から、このキャリア教育について思われることをお願いします。

枇杷委員 キャリア教育なんですけど、いろいろな方のお話を聞いたことがあって、親が仕事をして帰ってきた時に「疲れた、もう仕事に行きたくない」みたいな態度だと、子供たちは「大人になったらあんなに大変で疲れるんだ」と思い、仕事に対する悪いイメージを持ってしまうから、大人は「楽しかった」と言って帰ってこないといけない、という話でした。

これはデータを基にした話ではないですけど、コロナで、テレワークによる、家で仕事をする親が増えた関係で、子供たちがなりたい職業にサラリーマンがあがってきたという話があって、家で働いているお父さんやお母さんが、微妙にかっこよかった、ということのようでした。

キャリア教育、目標を持って勉強するというのは、とても大切なことだと思うのですが、2つあるような気がするんですね。身近にすごく憧れるような大人がいて、「ああいう人になりたい」と言って勉強をすると

か、職業にしても目標を持つ、私の場合で言うと、親に言われるがままに薬学部に行き、薬剤師になってしまったのですが、結果的には、良かったかなと思っています。

よく私は自慢するんですが、娘は、被服科関係の短大だったので、秘書実務とカラーコーディネーターなどの資格を持っているだけで、就職になかなか役立てることが出来なかったんですが、ハローワークで補助をいただいて、40歳前に短大に行き、栄養士になりました。だから、人はやろうと思えば、いつでも目標を持って仕事をというか、資格も取れるというところがあります。なので、子供たちに関しても、家庭の話になるんですが、大人が生き生きと仕事をして生活しているのを見ることで、何か楽しそうで、実は、農業に関しても親が一生懸命そういう仕事をしているのを身近で見ている、「自分もそれを引き継いでいきたい」と思う子もいるということを感じます。

今、薩摩川内市は、キャリア教育ということで、職場体験とかいろいろしてくださっていて、それはすごく良いことだと思います。いろいろな仕事があって、特に、職場体験とかに行った先では、丁寧にすごく一生懸命、子供たちに接して下さり、子供たちも、とても楽しく過ごせると思うので、仕事をするということが楽しいことなのだと、そこで思ってくれると良いなと思います。ただ、ある求職検索のコマーシャルのように、離職をすごく誘発するような情報が流れていることが、ちょっと心配だったりします。

市長が労働力について心配されていたのですが、今から日本は、海外からの労働力により仕事をしていただくという方向に変わっていくのかなと思います。別に差別するわけではないですが、ハーフの子供も世の中に増えていて、いろんな方が海外から入ってきて、その方たちが地元で根付いて、お仕事をしてくださることを進めていった方が良いのでは、と思ったりします。

キャリア教育に関しては、自分自身が目標を持って学校に行っていなかったもので、どうかなと思うところですが、ただ、先程も言いましたけれど、いつからでも思い立ってやり直せるということも、きちんと子供たちに伝えてもらえたら良いなと思うところです。

田中市長 ありがとうございます。労働力論になると、枇杷委員が言われたように、今そういう時代で、薩摩川内市内も300人ぐらいそういう技術研修的な方がいて、この前初めて国際交流センターで、ベトナムの方との交流がありました。そういう労働力の移入ということと、子供たちには多文化共生という労働力を含めて、我が薩摩川内市内にも数百人の技術研修の方がいらっしゃるということをお教えることも大事じゃないかなと思います。

常盤委員 昨年は、卒業後初めて、母校の卒業式に行ってきました。卒業式では、卒業生の入学時と卒業時の写真を一人一人出して、なりたい職業をそこに書いてありました。その卒業証書を渡す時に順番に、映像を流されていました。私は、ずっと地元に住んでいるものですから、近所の小さい頃から知っている子供もいて、こんなに成長したんだと思うことでした。新卒者

のフリーター志向とか、若者の早期離職とか認識する中で、子供たちも保育士になりたい、消防士になりたい、中には、ユーチューバーになりたいという子もいましたけれど、子供たちが未来のことを考えているということは感じました。

枇杷委員が言われたような夢や希望を持って職業に就くのはほんの一握りの人で、とてもやりがいを持ちながら仕事を続けるということについては、難しい時代だと思います。例えば、私たちは、昭和一桁生まれの親の世代が、高度経済成長期を懸命に生きている姿を見たり、職場の人や地域ともとても濃い関係であったりする中で、なんとかして生活のために働かないといけないというのは、実感しながら育ってきたかなと思います。今の子供たちは、ゲームがあったり、習い事とか豊かな環境で育って、それぞれの家庭がレジャーに出掛けるなど恵まれていて、「一生懸命なんとかして働こう」という意識を持つことも難しい、これは豊かな時代で仕方がないところもあると思います。その中で生活力とか、コミュニケーション力とか、自立を促進するというのは、教育の中にもいろいろ謳ってありますけれど、それを育てていくというのが、このキャリア教育とも併せて重要で、基本なのかなと思いました。

薩摩川内市が積極的に進められている小中一貫教育とか、ふるさとコミュニケーションですね、地域の中には生活があり、その社会があって、いろんな世代の人がいて、肌で感じて育つということは大事ではないかなと思います。

東郷学園に私も運動会で行かせていただいたんですが、就学期間が9年間と長いので、すごく関わる時期も長く、家族も地域も一緒に、皆さんがとてもあったかい中で、子供たちは育っていて、そういうことが力になって、なんとか困難なことでも切り抜けていくことになるのかなと思いました。

あと、私事ですが、うちの甥は、市内の高校を卒業したのですが、絵や映画などが好きで、ゲームのことで親と喧嘩したりして、親は「あれはきっとニートになる」と心配していたのですが、高校を卒業する年に、地元工場の大量の高卒採用が丁度良い時期にありまして、地元就職をしました。受けるのかな通るかなと心配していたのですが、よく考えると母親は地域活動もすごく積極的に一生懸命でしたし、学校の役員なども引き受けて、そういう地域や学校の中での協働とかで子供も育てられたのではないかなと思いました。私事も含めてですが、やはりこのふるさとコミュニケーション、小中一貫教育というのは大事だなと思います。

田中市長 ありがとうございます。軍神委員、キャリア教育をお願いします。

軍神委員 私が現役の頃、キャリア教育と言えば、ニートやフリーターが非常に増えて、学校は5日間職場体験学習をさせなさいという時期がありました。子供たちにとっては、職業意識というか、選択するために実際に体験するというのは非常に大切で、例えば京セラとか、市役所にも来ますし、消防とか、事業所の数が北中などは相当数多くて、力を貸してくれる方々がいるので、非常にありがたかったと思いました。子供たちはそこに行ってい

ろいろと体験し、これは大きなこれからの職業選択決定に入るのではないかと思います。中には京セラに行きたいという子供もいるし、市役所に行きたいと思っている子供もいるわけで、建設業にも行きますし、行って経験してくるとなると非常に良かったのではないかと思います。キャリア教育イコール職場体験学習ではないので、キャリア教育の中では、例えば人間関係を形成する能力とか、その課題を解決していく能力というのは、教育活動の全体の中でやらないと、実際には職業を体験したばかりでは、もう社会に出た方はよくわかるけれど、やはり人間関係がすごく大切で、同僚同士とか上司との関係とかいろいろありますが、学校はそういうところもわかって、今指導していると思うのですが、これらのことが非常に大切で、職業だけ意識を持たせれば良いというものではなくて、やはり人間として、きちんとやらなければいけないことなどの力をつけてあげたいなと思います。

田中市長 ありがとうございます。土器手委員、お願いします。

土器手委員 キャリア教育は難しいなと思いながら、私は、平成8年に高校を卒業していますが、その後こういうことが始まって、私たちは教育を間違われた時代なのかなと思いながらですが、このキャリア教育は、今、職業のこともありましたが、子供の時から最適な時期に働く意義とか、お金の大切さ等を年齢に応じて教えていくしかないのかなと思います。あとは働くということとはやはり親を見たり、周りを見たり、自分が好きな仕事に憧れてというのかなと思います。私が就職したのは、26か27歳で会社に入ったのが初めての就職で、私の会社は、高校を卒業し大学を出て、働きますよという段階でも職業選択肢に入らない職業です。大きくなったら鉄工所で働こうかなという子はいないですもんね。それこそ公務員、消防士、学校の先生になりたい、あと、重機に乗ってみたいとかいうのはあるけれど、溶接したいという子は絶対いない。

うちの会社に面接に来た方がいて、人材不足ということもあり、雇用しますということにしたんですが、そもそもうちが何の会社かもわからずにとりあえず来ているような状況で、「すみません。あなたが思っている仕事とは多分違いますよ」と。鉄を扱うのもいろいろあって鉄を削る仕事とか、くっつける仕事、曲げる仕事といった、1つの金属を扱うにもいろんな種類の職種があって、それさえも一般の人が理解できない、うちはコアな会社だなと思いながら。今、製造業は勢いに任せて採用をたくさんするようなどころがあるけれど、人口が減り少子高齢化と騒がれる中、やはり強いところがどんどん強くなって、うちみたいところはもう疲弊していく一方だなと。みんな120%毎日頑張ってくれていて、それでもみんなやりがいいあって頑張ってくれているからいいのですが。

そうなると、結局仕事の楽しみを感じてほしいというのがそもそもで、「疲れた」という話がありました。私も身近に「疲れた」と言葉を聞くことがあるんですよ、1つ屋根の下に住んでいると。「疲れた、疲れた。」とパートから帰ってきて、「疲れた。明日、晴れだから園庭遊びかな。」と言うのを聞きながら、何かすごく嫌そうだなと思います。そう疲れるなら辞

めればいいのにといいながら、もしかしたらうちの社員も家で「ああ、明日仕事だ、嫌だ。」と思っているのかなと考えたりします。そう思われなような会社を作ろう、経営者として楽しい会社を作ろうと私は思っているし、そういう会社でありたいし、一人一人に目を向けて、たまには目をつぶって、仲良くというか、あとは頑張った分の対価、評価はそこだと思っうんですね。そういうことをやっています。

このキャリア教育というは、やはり本人が持って生まれたものもあるので、特別支援について考えた時に、先日 50 代後半の方がそうかなと思ったんですが、そこで、他の社員に言ったのは、「働けるだけ働きたいということだから。他所にいても厳しいと思うし、焦らさず、怪我せずに仕事をしてもらおう」ということでした。うちも今、本当に人がいないという、人材不足の中にあるので若い社員に言ったことが「支援が必要な人でも 65 歳までちゃんと働けるような会社にしようね」と、「ゆっくりでも怪我せずに、そういう人も働ける職場にしないと、うちもいろんな人に対応できないと、自分たちの首を絞めるよ」と言ったところでした。

少子化、キャリア教育がうまくいって、ただでさえ人口が減っていくのだから、薩摩川内市に住んでいる子たちが、大人になったらいっぱい働いてもらえて活性化になれば良いのですけれど。私も切実な問題でありまして、意見は以上です。

田中市長 人口減少と人手不足というのは、エビデンスがありますので、これはもう統計的に、人口減少はどうあがいても 20、30 年、我が国は減るという中でどうやって持続するか、行政体自体と企業もそうなのですが、この議論はずっと続けなければなりませんし、今、各委員からありましたように、薩摩川内市が取り組んでいる職場体験を含むキャリア教育ですね、最初は少し乖離を言いましたけれど、やはりこの生きる力というか、コミュニケーション力の理念の部分の大きな共通項と、それから薩摩川内市の多様な現場を子供たちには幅広くこれからも全市的にインプット、すり込みというのが非常に大事ではないかなと思っています。教育長はいかがでしょう。

藤田教育長 先ほども少し企業連携協議会の話を出しましたけれど、今回設立されたこの協議会にしても、私は、キーワードは繋ぐことだと思います。単発でやっても、受ける子供たちは「いい会社なんだ。」「面白い仕事なんだ。」とか、先ほどもありましたように「してみたいな。」という、その瞬間は思うと思うんですけど、それを連続的に 3 年生の時も 4 年生の時も、中 1 になっても中 3 でも高校 1 年生でも、地元で働いている人たちが「いい仕事だよ、楽しい仕事だよ、やりがいがある仕事だよ。」と、今、土器手委員が言われたように「誰もがこう働ける環境なんだよ。」というのが、だんだん年と共に感じ方も違うと思う。だからこそ繋いでいくということがキーワードになってくるような気がしました。

学校に求められている、何々教育というものがたくさんあります。例えば、消費者教育、がん教育、これは、市民の必要性があつての、社会のニーズがあつての、学校教育への期待ですので、このキャリア教育、つまり

働く喜びとか、あるいは社会に出た時の義務としての、そこまで固くは捉えなくて良いと思うのですけれど、やはり繋いでいって、どの大人も、この働くことの楽しみ、喜び、大事さ、そういうものを繰り返し、子供たちには話をしていきたいなと思っています。

田中市長 ありがとうございます。今日は、大きなテーマで、子育て支援とキャリア教育とありましたが、何か全体的に言い残したことはありませんか。

あと、私も強く思うことで、最初の子育てとキャリア教育と連動しますが、私は市役所に45年前に入って、市役所、県議会、市長をさせてもらって45年経ちますけれど、この企業立地、働く場の確保というのは大きな命題でした。今も、これからも、この人口減少の中で働く場を作ること自体が定住になります。

それから衣食住、産業連環で経済の循環で良いことですが、キャリア教育のところで言いましたけれど、居住地と職業の選択の自由がある中で、私の責任としては、薩摩川内市は住みたくなるような、自発的に来るような、住みたくなる街、住みやすい街、子育て支援の教育の部分、福祉、民生的な補助助成のこと。それから楽しい街ですね。先程、土器手委員からありましたけれど、言葉として働くことが楽しい、自分の職場は楽しい、それからレクレーションを含めて、身近には花火大会や大綱引きとかあります。コミュニティの祭り、コミュニティにそういった素朴な住んでいるコミュニティが声をかけてもらって楽しいと気付いてもらって、自分が認められているという、そういうコミュニケーションということと、この自治会、地区コミュニティの声かけというか、見守られているという、相談できるような身近な仕組みがあるということが、住みやすさに、楽しい街になるんじゃないかなと私は思いました。

あと、冒頭でも言いましたけれど、今日大きな意見いただきましたので、教育分野を含めて、子ども・子育て支援はこれからも力強くやっていきますし、それから、キャリア教育も今日掘り下げた意見をいただきました。なお、教育委員会の方でさらに充実、拡充して子供たちに、我がふるさとの産業を含め、自然、文化はあるのですが、私がこの職場体験のこととか知らなかったものですから、そういったことをやっているということのアピールもぜひお願いしたいと思います。

それから令和6年度の当初予算については、今日、各委員から出ましたように、私も素案で思っていますけれど、高校生に対する特別奨学金の月1万5千円については、ぜひ各委員の方も教育委員会の起案になりますけれど、人数を増やす方向での議論と、それから、土器手委員から出ましたように奨学金返還の支援についても、今度は他の町との競争の意味になりますけれど、薩摩川内市に就職すれば、背負っている奨学金の分が他の町より軽く、市が多く補助してもらえるとというような仕組みを議会に相談していきたいと思っています。

最後に、何度も申し上げますけれど、教育部長にトイレの洋式化につきましては、計画的に段階的に県平均に追いつくような実施計画を作って、また当初予算で議論したいと思っております。非常に楽しい会議でした。ほかにご意見がなければ、私の座長はこれで終わります。

総務課長 熱心なご協議ありがとうございました。以上を持ちまして、令和5年度
第1回薩摩川内市総合教育会議を閉会させていただきます。